

追悼
菜々さんとの思い出

ゴスペル俳句会



序

令和四年十月二四日、親愛なる句輩であった我らが臼井菜々さんが天国へ凱旋されました。あまりにも突然のお別れに一同驚愕しました。コロナ禍が明けたらまた一緒に緒して吟行できることを楽しみにしていただけに返す返すも無念でなりません。

寡黙ながらも真摯な菜々さんの作句姿はみなさんの憧れであり、語彙豊富なその作品は私達のお手本であり目標でもありました。

残念ながら最後のお別れは叶いませんでしたので、そのような菜々さんへ心からの感謝と哀悼をご霊前に手向けたいという思いが起こされ、追悼文集という形でまとめ

ました。この小冊子に込めたひとりひとりの思いが天国の葉々さんに届くとともに、哀しみにあるご遺族への慰めの一助となることを願ってやみません。

星月夜仰ぐ天路の寧かれと　みのる

令和四年十月

やまだみのる

菜々さんの俳句

やまだみのる

白井菜々さんの遺された句集「星月夜」には、珠玉の作品が溢れています。わずかなページでは、菜々さんの魅力の全てを紹介することはできませんが、その一片に触れて菜々さんの足跡を偲びたいと思います。

菜々さんの俳句の特徴は、なんといっても豊富な語彙を駆使した格調高い表現力であることは誰もが疑わないところです。

末席へ吾も膝行す涅槃会図

風花し丹塗の宮を莊嚴す

夏めくや淀滔滔と藍深め

瀬の樂の呂律に沿ひて紅葉狩
三門へ松亭亭として涼し
路地涼し条理正しき城下町
校歴の百年を知る楠若葉
古町のうだつをかすめ燕来る
権現の磴は胸突き花嵐
百相の瘤もあらはや大枯木
万蕾の辛夷背にたつ観世音
那智黒の玉石るるとしぐれけり

鈍色の空へ溶けさふ冬桜
星霜の万葉苑に秋を聴く
一座二座三座と広げひつじ草
夏木立女人高野の磴ごごし
夕映えて線刻涼し磨崖仏
翠嵐に現れて白妙神の滝

十七文字の俳句では、こと細かく情景を説明することは出来ませんが、短く的確な措辞の斡旋がそれを補ってくれるのです。

凜と威儀を正した作品に混じって俳諧味ある滑稽俳句も見逃せません。一読ほのぼのと心に癒しが感じられ思わず頬が緩む、これこそが本物の滑稽なのです。

古都四温路地へ消えたる二人連れ
うぐひすにお隣さんの窓も開く
生身魂勝手つんぼと笑ひけり
これ何と問へば叱られ年の市
村人のすぐそこ遠し彼岸花
はたた神夫婦喧嘩を一喝す

秀句鑑賞…

「吟行は私の生きがい」というのが菜々さんの口癖で、対象に対峙して微動だにしないその姿は近寄りがたいオーラに溢れていました。斯くして授かった作品は、写生俳句の真髄といっても過言ではありません。

季語を一切説明せずに的確に本質を捉えて詠まれているところが非凡です。

十三仏つるべ落としの日を背負ふ

「釣瓶落とし」を季語として使うときは必ず「日」を入れよ…という青畝師の教えを守った秀句です。「十三仏つるべ落としを背負ひけり」では力感が違います。

せみしぐれ二重窓とは思はれず

遮音のための二重窓を突き抜けてくるほどの蝉しぐれに作者の驚きが隠されています。

池の面は合はせ鏡や松手入れ

松のことや庭師のことには全く触れていないのにみごとな枝ぶりを池に迫り出して
いる松の勇姿が見えてくるようです。

白南風に吃水深く帰漁船

「吃水深く」の措辞が大漁であることを暗示し、白南風の季語によって白波を二タ分
けにして意気揚々と帰港してくるようすが躍動して見えます。

明易し術後の痛み遠のきて

術後の痛みからようやく開放された安堵感を明易しの季語が代弁しています。

身に入むや断碑を見るに拝観料

一緒に宇治吟行したときに一末寺に保存されている断碑を見ての作である。なんとも切ない複雑な思いを季語に託した絶妙な作品です。

菜々さんの作品は、漢字とひらがなのバランスにも配慮が払われているところに注目したい。俳句は絵画として眼裏に連想し、韻として耳で楽しみ、書として愛でることもできる。単なる言葉あそびではないのです。

写生力というのは、蘊蓄本を百読して得られるものではなく、日々吟行に励み、多作多捨の修練に耐えぬいてこそ身につくものなのです。そして確固たるその写生力は、身辺句を詠むときにも活かされることを証明しています。

酔橘搾る今宵家族の揃ふ膳

寄せ鍋や明日は帰任の子を囲み

朝涼しサラダは今日も庭の幸

キッチンはお城窓の月

恙なく喜寿の一步や夫の春

大根煮て豆煮て主婦のひと日果つ

最後に…

去年今年ほ句に癒やされ励まされ 菜々

熱心という意味で菜々さんほど俳句を愛し、生きがいとされた方は居ないと思う。

決して安寧の日々ばかりではなかったと思いますが、苦しいとき悲しいときこそ慰めとなり心の支えとなるのが本物の俳句であることを菜々さんは告白しています。

私達には、菜々さんのその精神を継承して俳句を詠みつづけ、且つ伝えて行く義務があると思います。(みのる)

追
悼

野路の秋共に訪ひし地数知れず　はく子

私の俳句生活の日々は菜々さんなしでは語れません。あなたはそんな存在でした。どの句会、吟行にもいつも一緒でしたね。楽しい時もまた苦しい時もいつも一緒でした。本当にありがとうございました。いっぱいいっぱいお世話になりました。そんなあなたが居なくなり、出かけるのが億劫になってしまいました。俳句が大好きな菜々さん、天への道行きにも早速歳時記と句帳を取り出して句作に勤しんでおられるのでしょうか。私が行くまで待ってゐてください。天国でもまたご一緒してくださいね。(はく子)

汝れ逝くや金木犀の散る中を 満天

ゴスペル俳句の吟行には何時もはく子さんともども誘ってくださり、いろいろとご指導やアドバイスをいただいて感謝でした。ここ二、三年はコロナ禍のためにご一緒の吟行が叶いませんでしたこと残念でなりません。これからも天国から私達を見守っていて下さい。(満天)

佇めば汝の句とびだす枇杷の花　こすもす

あまりにも急なお別れ、本当に寂しく残念です。「お隣さん採らないのかしら枇杷たわわ」何故か記憶に残っているお句です。格調高い菜々さんの作品のなかではユーモアに富んでいて大好きでした。ご実家が丹波地方であること、ケアマネージャーの経験がおりとのこと、俳号がお孫さんのお名前であることなどなど楽しくお話してくださいました。どうぞ安らかに、天国でも素敵な俳句を詠んでくださいね。(こすもす)

汝の命享けし蠟梅花芽出づ せいじ

十年ほど前に菜々さんから蠟梅の種をいただきました。プランターに埋めておいたところ、三個ほどが芽を出し数年後には花が咲くようになりました。そのことをとても喜んでくださったことを思い出します。そのはにかむような笑顔が忘れられません。菜々さんは私の目標でした。吟行で一人たたずみ推敲しておられたお姿が目には浮かびます。俳句ならではの措辞もたくさん教えていただきました。なかでも「莊嚴す」が心に残っています。菜々さんの句集『星月夜』にも二句ほど掲載されていますね。これからも菜々さんを目標に俳句を続けていきます。安らかにお休みください。（せいじ）

遺句集にこころ通はす星月夜 あひる

菜々さんから夫せいじが頂いてきた蠟梅の種が大きめのプランターで育ち、冬から早春にかけてどれだけ心安らがせていただいたかわかりません。またお会いできるのを楽しみにしていました。菜々さんの句集「星月夜」を拝見しながら、一句一句に素敵な世界が広がることに感動しています。菜々さん、ありがとうございます。（あひる）

身に入むや訃報の汝れの句集読み 董雨

私は、広島県三原市在住のためお目にかかる機会は少なかったですが菜々さんの俳句を拝見するたびに格調の高さを感じておりました。到底菜々さんの域に近づくことは出来ませんが、少しでも勉強したいと思っています。突然の訃報に心痛みますが唯唯ご冥福をお祈りいたします。(董雨)

汝れ悼む木犀にほふ心字池 素秀

菜々さんとは句会で何度かご一緒にさせていただきました。ゴスペル俳句のみなさんは、私にとってはみな大先輩なのですが中でも菜々さんは一種近寄りがたいオーラがあり言葉を掛けさせてもらうこともほとんど無かったように思います。この度の訃報に接して何とも言えない喪失感を覚えました。気持ちの整理のつかないまま菜々さんの句集「星月夜」を読むしかありませんでした。心字池のお句が何句かあってふつと心に引く掛かるものがありましたので、拙いながら弔句にしたためました。心からご冥福をお祈りいたします。(素秀)

目つむれば汝れの面影星月夜　うつぎ

いつも物静かでありながら大きな存在感を放っていた菜々さん。もっとお話しなかった、もっと教わりたかった、残念でなりません。毎日句会をすぐ休んでしまう私を「楽しみにしてるのだから出してくれんといかんよ」とよく優しく励ましてくれました。そのお声を胸に精進してまいりたいと思います。心からご冥福をお祈りいたします。(うつぎ)

行く秋の汝と歩みし女坂 小袖

菜々さん突然のお別れでした。ゴスペル俳句の輪にぽっかりと大きな穴があいたようです。凜とした中に時折りにっこりと笑い返してくれましたね。ふるさとの柏原や篠山を心から愛し、御俳句ではジャム作りなどのお料理好きな一面も見せて頂きました。本当にありがとうございます。(小袖)

闘志秘め佇ちし面影秋天に たか子

菜々さんとは何度も句会でお会いし帰り道でもご一緒だったのに親しくお話し
思い出がありません。菜々さんは吟行や句会の時は真剣で居られるから余り話しか
けない方がいいよとどなたかに聞いたので新米の私などは…と遠慮したのかもしれませ
ん。いま思えばもっとお話したかったと悔やまれます。でも、格調高いお句を拝見
しながら少しでもその片鱗を学べればと菜々さんのお句を学びの糧とさせていただき
ます。空のかなたから私達を見守っていてください。ご冥福をお祈りします。(たか子)

凜として佇みをりし秋の人 ぽんこ

凜として吟行されていた菜々さんのお姿をいつも遠くから拝見していました。私達のお手本として遺してくださった秀句の数々、真摯な吟行姿勢は一生忘れません。心よりご冥福をお祈りいたします。(ぽんこ)

一粒の露の珠ふと消えしごと　よし子

菜々さんはいつも静かな方でした。吟行では一人佇んで微動だにせず句を詠んでおられる姿が印象に残っております。これからもまだまだご一緒に俳句をやっけていけると思っておりますのにほんとうに残念でなりません。心よりご冥福お祈り致します。

(よし子)

名乗りなき句座へ手向けむ濃竜胆　よう子

約十年前ゴスペル俳句に入門したばかりの私には控えめで凜とした菜々さんは近寄りがたい存在でした。吟行の時、ご自分でも必要なはずの杖を私に貸してくださってとても嬉しかったことが思い出されます。優しくかけて下さったお声も忘れられませんが、もっとお話をお聞きしたかったです。まだまだ沢山のお句を拝見したかったのに残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。(よう子)

澄む水に君の瞳を思ひけり　なおこ

菜々さん、五年前の奈良今井町吟行でお話できたときのことを忘れることはありません。初心者の私に「どうしたらそんな澄んだ目で俳句が詠めるのですか？　自分は、あなたのように澄んだ目で俳句を詠めなくなってしまった」と仰ったんです。私は驚き、そして菜々さんがどれだけ真剣に俳句と向き合ってこられ、今もなお努力をわすれないその姿勢に圧倒されました。それから、菜々さんの句をずっとお手本にして励んでいます。句会で菜々さんと同じ句を選べたときはすごく嬉しかったです。もう吟行や句会でご一緒できないのかと思うと、寂しく残念ですが、ゴスペル俳句でご一

緒できたご縁をありがたく、大切にして私なりに俳句と向き合っていきたいと思いま
す。心よりご冥福をお祈りいたします。(なおこ)

白菊に汝れの倂重ねけり わかば

突然の菜々さんの訃報に驚き寂しさが胸にせまります。吟行時にご一緒させていた
だくと私の知らないことをよく教えていただいたものでした。改めて菜々さんの句集
を読ませていただき造詣の深さにつくづく感服いたしました。これからもよきお手本
とさせていただきます、心からの感謝とご冥福をお祈りいたします。(わかば)

汝れの句を宙になぞれば流れ星 かかし

菜々さんの突然の訃報に驚愕です。ゴスペル俳句の吟行でご一緒したときに、自分は花や鳥の名前が苦手だと呟くと、丁寧に教えてくださったことが印象に残っています。見識の豊富さもさることながら、菜々さんの俳句への情熱にも触れることが出来て感激しました。天国でも先に召された句友と一緒に俳句談義に華が咲いている事でしょう。ご冥福をお祈りします。(かかし)

さよならと靡くか風の秋桜 なつき

毎日句会で菜々さんの俳句をよく選んでいました。吟行に参加させていただいた時、菜々さん始めゴスペル俳句の皆さんとお会いしてお話したことがとてもよい思い出になっております。菜々さんの俳句をもう拝見できないと思うと寂しいです。楽しい時間がありました。（なつき）

旅立ちし汝れはどのへん星月夜 智恵子

菜々さん、もっともっとお話したかったです。ゆっくりお休み下さい。(智恵子)

ゆくりなく君とわらひし紅葉狩 もとこ

私にとって菜々さんは近寄り難い大先輩でした。吟行でもいつも一人で佇んでおられたので声も掛けられない初心者でした。でも嵯峨野吟行の帰路にたまたま二人だけになる機会を得て、ご主人の話やご自分の生活の話などいろいろ話が弾み、『鼻めがね落つるに任せ春眠し』の句にあるようなお茶目な一面も知る事ができました。でも、その後コロナ禍で、お目にかかることも少なくなってしまうました。私は菜々さんの格調高く詠まれた句も好きですが、『文化の日孫に教へる箸づかひ』のような、生活の中での身边を詠まれた句が好きです。もっとお話して、菜々さんの感性に触れ

たかったという思いで一杯です。心から冥福をお祈りします。(もとこ)

菜々さん、ありがとうございます！

菜々さんが初句集を編まれるにあたり再選を託された私は、珠玉のような作品の数々に圧倒されたのを思い出します。それらはまさしく満天に煌めく「星月夜」のようだと感じたので句集名として提案した処、とても喜んでくださったのを思い出します。

ベランダは私の宇宙星月夜 菜々

吟行一筋に励まれた菜々さんのことだから今頃は天国の花野に遊んで推敲に余念のないことでしょう。やがてまたその処であいまみえる日のあることを信じて精進いたしましょう。追悼を寄せてくださったゴスペル俳句会員おひとりびとりの祈りに合わせてこころより菜々さんへの哀悼をお捧げします。合掌

令和四年十一月

やまだみのる

